

令和6（2024）年度 事業報告

令和6年4月1日～令和7年3月31日

《公益目的事業1》（指定寄付に基づく社会福祉事業）

【海外難民救援事業】 110万円

毎日新聞社と東京、大阪、西部の3事業団が1979年（昭和54年）から取り組み、毎日新聞紙面と連動した「海外飢餓・難民救援キャンペーン」募金。24年は世界でも有数の難民受け入れ国であるアフリカ東部の内陸国・ウガンダを取材し、紙上で展開した。読者の反響は大きく、多くの浄財が寄せられた。西部社会事業団は、東京・大阪両事業団とともに国連世界食糧計画WFP協会、ペシャワール会やロシナンテスをはじめとするNGOなど18団体に総額1210万円を届けた。キャンペーン当初からの救援金の総額は17億3198万8344円になった。

海外救援金の配分先と配分額は以下の通り。

【西部管内】

ペシャワール会	30万円
ロシナンテス	30万円
国連世界食糧計画WFP協会	50万円

【東京・大阪管内】

国連UNHCR協会	120万円
国連世界食糧計画WFP協会	150万円
日本ユニセフ協会	100万円
国境なき医師団日本	130万円
日本国際ボランティアセンター（JVC）	40万円
難民を助ける会（AAR Japan）	140万円
シェア=国際保健協力市民の会	40万円
AMDA	30万円
シャンティ国際ボランティア会	40万円
ワールド・ビジョン・ジャパン	100万円
難民支援協会	40万円
緑のサヘル	30万円
バーンロムサイジャパン	30万円
ゴーシェア	25万円
	25万円
	60万円

Piece of Syria
テラ・ルネッサンス

合計 18団体 1210万円

【小児がん征圧募金】 100万円

1996年（平成8年）から展開している3ヨ新聞と毎日新聞社会事業団のキャンペーン「生きる——小児がんの子どもにっとともに」と連動した募金で、小児がんの子どもを守る会や保護者グループなど、病と闘う子どもたちを支援する組織の活動援助金に充てる。当年度は東京・大阪と合わせ全国で31団体に1540万円を配分。第29次までの贈呈総額は4億4240万円となった。

小児がん征圧募金の配分団体と配分額は以下の通り。

【西部管内】

にこスマ九州	15万円
九州がんセンター小児科親の会・大きな木	10万円
久留米大病院小児科血液グループ親の会・木曜会	10万円
小児がん家族会・ひまわりキッズ	10万円
長崎ペンギンの会	15万円
宮崎ひまわりキャンプ	10万円
レモネードスタンド in ふくおか実行委員会	15万円
レモネードスタンド in SAGA 実行委員会	15万円

【東京・大阪管内】

がんの子どもを守る会	230万円
難病のこども支援全国ネットワーク	110万円
公益信託日本白血病研究基金	100万円
ファミリーハウス	20万円
スマイルオブキッズ	20万円
メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン	20万円
そらふちキッズキャンプ	20万円
小児脳腫瘍の会	20万円
アジア・チャイルドケア・リーグ	20万円
パンダハウスを育てる会	20万円
ゴールドリボン・ネットワーク	20万円
あいち骨髓バンクを支援する会	70万円
ふくふくばるーん	70万円
	70万円
	70万円
	70万円
	70万円

京都大学医学部附属病院小児科ボランティアグループ「にこにこトマト」	
京都ファミリーハウス	
しぶたね	
守口ぶどうのいえ	
日本クリニクラウン協会	70万円
こどものホスピスプロジェクト T ₄ RUMI こどもホスピス	70万円
名古屋小児がん基金	70万円
三重大学病院小児科父母の会・ひだまり	70万円
京都・がんと生殖医療ネットワーク	70万円
未来 ISSEY	70万円
	<u>合計 31団体 1540万円</u>

【災害被災者救援事業】 1045万円

国内外を問わず、予期せぬ大規模災害が発生し、大きな被害が想定される場合、東京、大阪の事業団と協議して、緊急に被災者救援金を呼び掛ける。24年度は能登地方を9月に豪雨が襲い、地震の被災者が身を寄せる仮設住宅も浸水。地震と豪雨、2度の災害で甚大な被害を受けた能登地方に多くの救援金が寄せられた。当事業団は被害状況の見え始めた5月に石川県に、8月に日本赤十字社（被災地全域）にそれぞれ300万円、200万円を第3・4次分として贈った。

また、東日本大震災救援金と毎日希望奨学金にも、たくさんの方々から善意が寄せられた。東日本大震災救援金は岩手県・宮城県・福島県にそれぞれ15万円▽毎日希望奨学金は事務を担当する大阪社会事業団へ500万円送金、ともに残金は次年度へ繰り越した。

西部社会事業団への救援金・奨学金は、以下の機関・団体に配分、贈呈した。

【能登地震救援金】

石川県	300万円
日本赤十字社（被災地全域）	200万円

【東日本大震災被災者救援金】

岩手県	15万円
宮城県	15万円
福島県	15万円

【毎日希望奨学金】

大阪社会事業団へ	500万円
----------	-------

《公益目的事業2》(一般寄付に基づく社会福祉事業)

【児童福祉事業】 370万6：₅6円

児童虐待や養育放棄など、子どもたちを取り巻く環境は依然として厳しい。社会のあすを担う大事な子どもたちを守り、育むため、24年度は6事業に助成・援助した。

合同自立体験セミナー 筑豊京築地区児童福祉施設長会が、管内の児童養護施設に在籍する中高生を対象に、職場体験などを通じて卒業後に社会人としての自覚を促すために実施している。当期は7月7日に識者による講演等があり、開催に要した費用を助成した。

10万円

田川児童相談所管内児童福祉施設「ボウリング大会」 福岡県田川児童相談所と筑豊京築地区児童福祉施設長会が、児童の体力向上及び、他施設との親睦・融和を深めるために毎年開催している。当期は11月2日に福岡県飯塚市の麻生塾ボウルで開いた。

4万円

田川児童相談所管内児童福祉施設「フレ愛レクレーション大会」 福岡県田川児童相談所と筑豊京築地区児童福祉施設長会が主催。9月14日、田川郡糸田町の糸田アリーナで10施設の児童83名、職員78名が参加した。玉入れや障害物競走など各種競技を楽しんだ。

5万円

「一円玉募金」による無料学習塾事業を支援 「NPO法人 和む」の吉本満廣・理事長が給付型奨学金を支給するため、15年秋から始めた「一円玉募金」。国が新しい給付型制度を導入したため、奨学金給付は21年度で終了したが、経済的に困っている家庭の中学生を対象にした「無料の食事付学習塾」を新たにスタートさせた。運営は厳しい状況が続いているが、当事業団も引き続き助成した。

10万円

青少年の自立を支える福岡の会「自立援助ホーム」へ運営費助成 児童養護施設退所後の15~20歳の青少年の自立を支援するNPO団体。08年7月に「かんらん舎」をオープンし、15年度には2か所目の「結ホーム」を開設、さらに19年度に「リープ」▽23年度に4か所目の「スイッチ」の運営を開始した。福岡市からの補助金や会員の会費、寄付金で運営しているが、資金不足のために厳しい運営状態が続いているが、今期も母の日・父の日募金を財源に助成。今期は「スイッチ」で利用するパソコン2台分の購入費に充てた。

17万円

児童福祉施設への新入学・卒業祝い品プレゼント 歳末助け合い募金「愛の義援金」を財源に、児童養護施設や障害児、肢体不自由児、盲ろう児などの児童福祉施設の小学校入学と中学・高校卒業予定者に、お祝いの記念品を贈っている。今年度も福岡・山口両県内の施設児童ら計 66 施設を対象に該当者の有無を調査。61 施設に対象者 428 人がおり、新 1 年生にはランドセルか、リュックサック、手提げセット、雨具セット、図書カード（4 千円分）のいずれか▽中・高校卒業予定者には目覚まし時計か図書カード（5 千円分）を選んでもらい、祝い品としてプレゼントした。

324万6356円

【障害者福祉事業】 88万5788円

助成・援助の事業件数としては最も多く今期は 15 件で、うち 4 件が名義後援のみだった。

第49回「わたぼうし音楽祭」 奈良たんぽぽの会などが主催する障害のある人たちの「心を歌う音楽祭」で、毎日新聞社や同社会事業団などが後援。8 月 4 日に奈良県の「DMG MORI やまと郡山城ホール」で開催した。全国から寄せられた 618 作品の中から最高賞の「わたぼうし大賞」には、千葉県松戸市、かけるなうじーよさん（34）が作詩・作曲した「ボクノウタ」が選ばれた。文部科学大臣賞には北海道白老町の山本和真さん（21）が作詩、札幌市の田中貴志さん（52）が作曲した「僕は生きていく」が選ばれた。

5万円

傾聴のココロエ授業を届けるプロジェクト 一般社団法人「生き方のデザイン研究所」は、障害のある人とない人がともに、だれもが暮らしやすい社会をつくる目的で設立された。傾聴のココロエ授業を届けるプロジェクトは、人の話を一所懸命に聞く「傾聴」を学び、「困ったときには誰かに相談する」「話を誰かに聞いてもらえる」体験を積み重ねることで、孤独やいじめの芽を摘み、自分も他者も大切にする心を育み、ひいては若年層の自死防止につなげる企画。北九州市内の小学校で授業を行い、「子どもたちが落ち着いて授業に集中できるようになった」などの声が寄せられた。

10万円

「声の点字毎日」発行 週刊「点字毎日」を録音テープに吹き込み、ハンセン病で視覚も皮膚感覚も失った人たちへ寄贈する事業で、月 2 回発行する。東京・大阪との共同事業。2007 年 8 月の配布分からデイジー版 CD「点字毎日音声版」に切り替えた。西部管内では菊池恵楓園（熊本）、星塚敬愛園、奄美和光園（ともに鹿児島県）の 3 か所の国立ハンセン病療養所に贈った。

5万円

第92回全国盲学校弁論大会 全国盲学校長会と毎日新聞社会事業団、点字毎日が主催して10月4日、水戸市のホテルレイクビュー水戸で開催。全国7地区予選で選ばれた9人が出場。「大切な場所」と題して発表した関東・甲信越地区代表で埼玉県立特別支援学校塙保己一学園高等部普通科3年のカーン・ファティマ・フランシスコさん(18)が優勝した。 10万円

第35回北九州市障害者水泳大会 市障害者スポーツ協会が市内の10歳以上の身体障害児を対象に7月7日、小倉北区三郎丸の市障害者スポーツセンター「アレアス」屋内温水プールで開催した。市内各区から障害者が出場し、日頃の練習の成果を発揮した。 5万円

九州地区聾学校体育・文化連盟大会 九州地区ろう学校の体育・文化の祭典で、9月26~27日、鹿児島市の西原商会アリーナと鹿児島聾学校で開催。九州各县のろう学校の小学生~高校生が参加した。当事業団は、各競技の入賞者へのメダル(103個)を贈った。 10万1970円

第43回北九州市障害者ボウリング大会 市障害者スポーツ協会が障害者スポーツ振興のため、12月15日、八幡東区の桃園シティボウルで開催。各地から13歳以上の選手49人、ボランティア18人が参加し、障害区分に分かれて1人2ゲームずつプレーして順位を競った。 5万円

日本ふうせんバレーボール協会運営費助成 同協会は「障害者の完全参加と平等」を掲げ、競技普及を通じて、障がいや性別、国籍で「分ける」のではなく、「共に」暮らしていける社会を目指す。2012年度までは全国大会への助成という名目で助成金を支出してきたが、13年度から同協会から「年間運営費に変更して欲しい」との要請があり、変更して支出。北九州発祥の風船バレーボールの普及・振興を図る同協会の年間運営費を助成している。 10万円

中間市年末餅つき大会助成 中間市の手をつなぐ育成会が市内の知的障害児らの交流と年末レクリエーション行事として餅つき大会を企画。コロナウイルス感染防止やインフルエンザの流行により、5年ぶりの開催となったが、子どもたちは元気いっぱいに楽しんだ。 8万円

高次脳機能障害啓発研修会の助成 高次脳機能障がいは、脳卒中や交通事故、低酸素脳症などによる脳損傷で引き起こされる。障害部位によって後遺症が様々なため、周囲の理解を得るのは難しいのが現状。同じ障害で困っている人が多くいるのに、よく理解されておらず、啓発と支援の充実を目指して2017年に考える会「虹」が発足。11月24日、北九州市総合保健福祉センターであった研修会では、専門家の講演会や当事者の体験談などがあり、約50人が参加した。

10万円

第44回「門出を祝う会」 北九州市と市手をつなぐ育成会が市内の知的障害児者の中で、入学や卒業、成人、還暦など人生の節目を迎えた人たちを励ます催し。ウェルとばた3階中ホールで開催され、約120人が参加し、式典のほか、お祝いのアトラクションとしてウクレレ演奏やフラダンスが披露され、思い出に残る祝いの日となった。当事業団は、後援するとともに対象者39人に記念品の置時計を贈って励ました。

10万3818円

◇名義後援事業◇

第61回点字毎日文化賞 盲人文化の向上と福祉増進に先駆的業績をあげた個人、団体を表彰することで社会の理解を深めるのが目的。24年度は、内閣府の障害者政策委員会初代委員長、国連の障害者権利委員会副委員長などを歴任し、日本の障害者の現状を世界に伝え、共生社会の実現に尽力した、静岡県立大名誉教授の石川准さん（静岡市）が選ばれた。

第43回肢体不自由児・者の美術展 公益財団法人福岡県肢体不自由児協会と社会福祉法人日本肢体不自由児協会が主催。障害を持つ人たちの生きがいや社会参加、自己表現などを目的に、全国から絵画や書、タイプアート、デジタル写真を募集。応募作品の中から入賞した作品を福岡県庁1階ロビーに展示した。

福岡県肢体不自由児協会70周年記念の会 同協会は昭和29年12月27日に設立され、同県内の手足が不自由な子どもたちの福祉向上のため活動している。70周年の節目の年を祝う「記念の会」では、関係者250人が参加し、体験発表のほか、市民公開講座としての記念講演やピアノ演奏などを催した。

第63回北九州市障害者スポーツ大会 北九州市の障害者スポーツの祭典で、全国障害者スポーツ大会の選手選考も兼ねた大会。4月13日に小倉北区の障害者スポーツセンターで卓球競技▽5月25日に八幡西区の本条陸上競技場で陸上競技やフライングディスク競技があった。

【医療福祉事業】 30万円

医療ボランティア「福岡ファミリーハウス」へ助成 小児がんなどの難病治療を受ける子どもとその家族のための滞在施設（福岡市内に2施設・5部屋）を運営。九大病院をはじめ、九州がんセンター、福岡市立こども病院などに入院、通院する患児や付き添う家族に1部屋1家族1泊 1000円という安価で提供し、喜ばれている。当年度も、募金額に左右されない医療福祉事業として、社会福祉寄金から支出した。

30万円

【高齢者福祉事業】 20万円

「80歳からの合唱団北九州」運営費助成 「80歳からの合唱団北九州」は①歌うことで健康寿命を延ばす②歌うことで生きがいができる③歌うことで仲間をつくる④歌うことで社会に貢献する（地域イベントの参加、福祉施設や病院等への慰問など）⑤合唱仲間で生きる楽しみをつくる——が目的。現在は143人が参加（平均年齢86歳、最高齢96歳）、月1回の練習には100人ほどの団員が参加している。年1回「ウェルとばた」でのコンサートを開き、各区でのクリスマスの催しにも出演して元気な歌声を響かせている。費用は団員の会費でまかなっているが、活動を充実させるため、遺贈寄付（高齢者福祉での利用を希望）から運営費を助成した。

20万円

【福祉団体助成事業】 145万3000円

今期は前年度と同じ12団体に助成金を贈った。いずれも継続事業で、前年度並みの助成をした。

あしなが育英会へ助成 「母の日・父の日募金」は母の日、父の日にちなみ、「プレゼントをしたい親がもういない」「プレゼントをしたつもりで、そのお金を遺児たちへ」との趣旨で、05年から毎日新聞の紙面キャンペーンとしてスタート。当初はあしなが育英会を募金のあて先にしていたが、親がいても恵まれない子どもたちが急増している現状から「遺児に限らず、恵まれないすべての子どもたちに対象を広げよう」と、07年度から毎日新聞社会事業団が窓口となった。今期も5～7月の3カ月間募集、西部へは25件55万9000円の寄付があった。これを原資に児童福祉事業の「かんらん舎」（17万円）と「あしなが育英会」に助成した。

25万3千円

福岡、北九州、佐賀、大分の「いのちの電話」へ助成金 自殺者の総数は12年度から3万人を下回るようになったが、自殺予防のための電話相談「いのちの電話」は、依然として重要な存在だ。しかし、どの団体も維持運営費は寄付金が頼りで、電話相談を受ける相談員は主婦を中心としたボランティアが24時間体制で当たっている。24年度も4団体に助成し、うち佐賀、大分両団体は通年事業で、福岡、北九州両団体は歳末募金「愛の義援金」を財源に助成した。

40万円

「福岡盲ろう者友の会」活動費助成 福岡県内の視覚、聴覚とも不自由な人たちの福祉向上と社会参加の促進のため、03年4月に発足。盲ろう者は外出するにもボランティアの手助けが欠かせないが、会員の会費やカンパが頼りの運営で、当事業団は発足当初から継続して助成している。

15万円

ホームレス支援のNPO法人「抱樸」に助成金 長年、ホームレスの支援、自立活動に取り組んでいる抱樸では①ひとりの路上死も出さない②ひとりでも多くの人を路上から脱出させる③ホームレスを生まない社会を創造する——を掲げて活動している。特に②の活動では生活支援、住宅支援、各種保健プログラムなどを展開しながら、自立に向けた取り組みをしている。助成金は、炊き出し現場で配布する医薬品購入に充てている。

10万円

山口県共同募金会 歳末募金「愛の義援金」を財源に、同県共同募金会を通じ、障害のある子どもたちのために活用した。共同募金会は肢体不自由児協会に助成金全額を寄託し、肢体不自由児のための研修費用に充てた。

10万円

福岡県交通遺児を支える会 交通安全運動に積極的に参加する一方で、交通事故遺族の実態調査や遺家族への盆・正月の見舞金、入学・卒業祝い金の贈呈、各種の生活相談など、交通遺児の支援事業をしている。

15万円

九州盲導犬協会 九州及び沖縄・山口両県をエリアに視覚障害者の自立支援のため、多数の盲導犬を育成し、無償貸与している。現在46頭が実働しているが、なお10人の方が待機中で、絶対数が不足しているという。更なる訓練士の養成や繁殖犬の増加などが求められている。

10万円

北九州あゆみの会 北九州市内の障害者の自立支援のために、本人や家族の各種相談を受けている。会では4人の相談員を配置、状況や生活環境に合わせた福祉サービスなどへの橋渡しをしており、助成は車両維持管理費や人件費に充てられた。

10万円

北九州市障害福祉ボランティア協会 同協会は、障害者福祉を中心としたボランティア推進組織で、ボランティアをする正会員と支援する企業・団体などの賛助会員で構成。地域の中で障害のある人もない人も共に暮らせる福祉の風土づくりを目指す。会報の発行や啓発パンフの作成、講演会や研修会、出前講座、養成講座を開催するなどしてボランティア養成に努めている。

10万円

【毎日社会福祉顕彰】 112万9343円

毎日新聞社会事業団の創立60周年を記念して昭和46（1971）年に創設した東京・大阪・西部3事業団の共催事業。社会福祉の向上に貢献した個人や団体を顕彰するもので、今期の第54回毎日社会福祉顕彰には19件の推薦応募があった。審査の結果は、以下の通り。

個人からは、地元で生き生きとした生活ができるよう様々な施設や事業の整備に取り組み地方福祉のモデルケースをつくった酒井勇幸さん（社会福祉法人いなりやま福祉会常務理事＝長野県千曲市）。団体からは、海外出身者と日本人との間に生まれた子どもたちの認知など人権を守る活動をしている特定非営利活動法人 JFC ネットワーク（鈴木雅子代表＝東京都新宿区）▽障がい者が自由な発想で創作する「アール・ブリュット（生の芸術）」を実践する社会福祉法人やまなみ会やまなみ工房（山下完和施設長＝滋賀県甲賀市）――1個人2団体に決まった。受賞した個人・団体には賞牌と賞金（各100万円）が贈られた。

【歳末事業】

歳末助け合い募金「愛の義援金」 12月1～28日を受付期間として募集。毎日新聞紙上で募金受付開始の社告を掲載したほか、過去の寄付者らに協力依頼状を送付するなどして募金を呼び掛けた。結果は、総件数771件、募金総額951万9472円で、前年比95件増、約25万円増だった。なかでも社会福祉寄金が大きく伸びた。

<募金項目>

社会福祉寄金	472件	543万4283円
海外救援金	75件	67万3170円
小児がん征圧募金	71件	60万2660円
東日本大震災救援金	1件	20万円
毎日希望奨学金	100件	152万153円
能登地震救援金	52件	108万9206円
合計	771件	951万9472円

<募金経費>

労務費	21万5820円
通信費	44万6490円
印刷・製本費	12万1990円
合計	78万4300円

「社会福祉寄金」から「募金経費」を引いた差額（543万4283円－78万4300円）464万9983円は、一般福祉事業費に充てた。

歳末チャリティー「全国寄贈書画・陶工芸品即売展」 全国の著名な画家や陶芸家などから寄贈された作品を一堂に集めて開く師走恒例のチャリティー行事。多くの美術愛好家に喜ばれている。12月第1～第3週の土・日曜日に北九州、山口、福岡の順で開催した。

今期は洋画、日本画、陶芸、工芸、書家、高僧・宗教家、文化・芸能人などの約500人の方々から、約900点の寄贈を受けた。寄贈された作品に前年から引き継いだ作品も加えて3会場に配分。それぞれ1500～1600点の大規模な作品展になり、九州・山口はもとより中国、関西方面からも愛好家らが訪れた。また、25年3月8日、年度末展を北九州で開催し、歳末展で残った作品を、さらに求めやすい価格で即売した。

収益金は、恵まれない子どもたちや障害者などを支援する福祉団体への運営助成金、障害児者研修など各種福祉事業への助成金、ホームレス自立支援などに取り組む団体への助成金として活用したほか、25年度事業にも役立てる。

会場別売上高と経費は以下の通り。

＜会場別売上高＞

北九州展（井筒屋新館）	511万 106円
山口展（山口井筒屋）	320万 5990円
福岡展（福岡ファッションビル）	215万 9805円
年度末展（毎日西部会館）	213万 270円
期間外（24年度）	7万 7250円
合計	1268万 3421円

＜即売展経費＞

書画材・額縁等	218万 3958円
作品寄贈者謝礼等	21万 6205円
会場費	287万 3232円
労務費	198万 8430円
通信・運搬費	160万 178円
印刷・製本費	29万 6622円
旅費・交通費	30万 5600円
事務費	4万 689円
雑費	32万 1992円
合計	982万 6906円

収益金（1268万 3421円 - 982万 6906円）の285万 6515円は、社会福祉寄金として一般福祉事業費に充てた。

《収益事業》（保険に関する事務の受託事業）

当事業団唯一の収益事業として位置付けている保険事務受託事業は、毎日新聞西部本社とその関連会社の九州センター社員を対象に、生命保険の事務作業を受託。令和6年度の収入は前年より約9%少ない63万 287円だった。